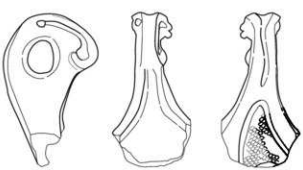
『文化財学報』第42集
奈良大学文学部文化財学科刊　2024年３月

栃木県栃木市中根八幡遺跡第９次発掘調査概要報告



中根八幡遺跡学術発掘調査団

栃木県栃木市中根八幡遺跡第９次発掘調査概要報告

中根八幡遺跡学術発掘調査団

１．中根八幡遺跡の概要

中根八幡遺跡は、栃木市南部（旧藤岡町中根）の渡良瀬遊水地（旧赤間沼）に面した台地縁辺部に立地する縄文時代前期～晩期、弥生時代、中世～近世の複合遺跡である。これまでの調査によって、東側のＣ区は西側のＡ区と比べローム層検出面の標高が高く、もともと西側に向けて傾斜していたこと、Ａ区でみられた黒色土より上のローム再堆積層は見られず、仮に当時存在していたとしても既に削平されていることが判明しており、盛土が環状に存在していたかどうかの検証は不可能となったが、遺跡全体の特徴的景観を示す用語として「環状盛土遺構」の語は当面使用している。その「窪地」部分には中近世に寺院が所在していた。

2023年度はＣ区の調査を継続した。期間中、國學院大學栃木短期大学人間教育学科の体験発掘や、現地説明会とあわせた「縄文まつり」を初めて開催したほか、調査後も展示・ワークショップ・講演などの地域連携活動を行った。中根地区ならびに地権者・関連事業の講師をはじめとする協力・援助を得た関係各位に改めて謝意を表する。

２．Ｃ区の調査

本年度調査範囲

Ｃ区は、遺跡中央の「窪地」から東側へ緩やかに傾斜し盛り上がった位置、当初想定した「環状盛土」の内側縁辺部に設定した。昨年度に引き続きCb32 ～ 36 グリッドを掘り下げるとともに、４次・５次調査で南側半分のみ掘り下げていたCa32・33グリッド全体をCb32・33と同じ高さまで掘り下げた。

柱穴群　Ca32・33では、５次調査時に遺構確認で留めていた箇所を含め全体的に掘り下げた結果、P1・P3・P4および、当初P2とした溝状の掘り込み内から２つの柱穴と考えられるピットを検出した。P1・P3・P4は５次調査断面図によると６層（旧３層）以上から掘り込まれている。

土坑P5 ～ 7　竪穴建物跡と重複し、Cb32でP5、Cb33・34でP6・P7を検出した。P5・P6は５次調査での遺構精査では平面的に存在を確認できなかったが、今回断面を確認すると５次調査遺構確認面（表土直下）よりも上から掘られている。遺物は称名寺Ⅰ式が主体である。５次調査遺構確認面からの深さはP6で82cmである。一方、北壁断面では、P6・P7は10層に切られている。

出土土器　Ca32・33は北側に掘り残してあった部分から掘り下げを行ったため、Ca33で曽谷式、Ca32で加曽利B2 ～ 3式が最新で、中期の可能性がある小破片までを含む。Cb33 ～ 34では中期～称名寺式のみ、Cb36は堀之内式２点のみ、Cb32・35は詳細時期不明破片のみである。称名寺式はⅠ式が主体である。

石包丁　Ca33の1層（表土）から出土した。半分に欠損し、かつ先端部は潰れているが、本来は直線刃半月

形態（野本1989）と推定される。紐孔の有無は欠損により不明である。刃部には両面とも顕著な研磨痕が観察されるが、使用によるためか刃自体はやや鈍くなっている。石材はホルンフェルスあるいは千枚岩と推定される。石庖丁であれば、弥生時代中期後半～後期前半のものと考えられる。これまで栃木県内では石庖丁の出土例がなく、注目される資料である。

C区の遺構・包含層形成過程（予察）

具体的な数値は改めて確認する必要があるが、年次別の出土土器の割合をみると、９次（８～10層・竪穴覆土）は称名寺式中心で加曽利B式期まで、８次（４～７層）は現時点での集計であるが加曽利E式（土器集中を含む）、加曽利B式、称名寺式、堀之内式が概ね２：２：１：１の割合、７次（Cb33～Cc36エリア土坑ピット群第２面、４層）は阿玉台式～加曽利E式を含むものの大半は加曽利B式でそれ以降は含まない、５次（Cb33～Cc36エリア土坑・ピット群第１面・３層）は７次に近いが後期安行式を含む。４次のCa32・33グリッドからは前期～晩期があり、Ca28・29グリッド表土からは弥生時代の沖Ⅱ式併行の土器が出土している。C区を含むクリ林には一面にわたって土器が散布しているが、４次調査で「環状盛土遺構」の中央部から「盛土」部にかけて試掘を行った結果、中央に近いCa16・17、20・21地点では表土以下には縄文時代の包含層は残っていないことからこれらの土器片は「盛土」部の上面が削平されて散在したものと考えている。これに遺構の所見を加えると、以下のような過程が復元できる。①12層上：加曽利EⅠ式土器集中の形成→②10層上（称名寺Ⅰ式期）ピット群の構築→②整地（削平・盛土）→③４層上（称名寺Ⅱ式期）：埋設土器SK6、土坑P5・P6の構築→④４層上（加曽利B式期）：Cb33～Cc36エリアの土坑・ピット群第２面の形成→⑤上面の削平→⑥３層上（後期安行式期）:Cb33～Cc36エリアの土坑・ピット群第１面の形成（P7逆位注口土器埋納土坑など）→⑦晩期～弥生の活動→⑦古代～現代：上面の削平。

３．９年間の成果

2015年度から９年にわたって実施してきた中根八幡遺跡現地での実習発掘調査は本年度をもって一端区切りを迎える。この調査は、後期中葉や晩期中葉という関東地方の縄文文化の画期と関わると考えられてきた「環状盛土遺構」について、より具体的に遺跡の形成過程を明らかにすることや、交流の結節点としての栃木地域を中心とした地域間関係の解明を大きな目的として、「環状盛土遺構」西側（A区）、北側（B区）、東側（C区）の３か所を主な調査地とし、様々な理化学的分析との共同研究を含めて検討を重ねてきた。各調査区を十分に掘り切ったわけではないが、遺存状況の確認と形成過程の検討という所期の目的に関わる現地調査は概ね達成することができた。晩期を含む最上部の土層はA区周辺を除いて遺存していないが、後期後葉までの遺構・遺物は良好に保存されていることが明かになった。遺物は各地点で前期から晩期までを確認している。遺構は、調査区の狭さから全体像を見出すことはできなかったが、各調査区でピット・土坑を確認し、表土直下から慎重な遺構確認を行ったC区では累積的な遺構構築を確認することができた。今後、補足調査やデータの整理をおこない、最終的な成果報告をまとめたい。

こうした考古学上の課題のみならず、とちぎ子どもの未来創造大学事業や、栃木県大学地域連携活動支援事業の一環としての市民や子どもたちを対象とした公開・活用事業を、國學院大學栃木短期大学人間文化学科の教員養成課程の協力を得て積極的に進めてきた。実習発掘としての調査に参加し、文化財専門職に進んだ両大学の学生も少なくない。実際の調査の進行はこうしたOB・OGに依るところが大きく、その一端は

2022年公開のドキュメンタリー映画「掘る女」（松本貴子監督）でも紹介されたとおりであり、学生教育・一般市民向けの活用事業も大きな成果を得ている。なお、栃木での実習発掘調査・地域連携活動は國學院大學栃木短期大学によって別地点を対象に引き継がれる予定である。　（大工原・中村・小林）

付記

本調査は國學院大學栃木短期大学学長を主体者、大工原豊を担当者として、令和５年６月21日付で栃木県教育委員会教育長宛（栃木市教育委員会経由）で文化財保護法第92条に基づく発掘の届出を提出し、６月28日付で県教育長より実施許可の通知を得た。調査は８月21日～28日に実施した。出土品については８月28日付で栃木警察署長へ埋蔵物発見届、県教育長宛に埋蔵文化財保管証を提出し、10月３日付で県教育長より文化財認定を受けた。また、前年度に引き続き「文化交流の交差点「栃木」の起源を縄文時代に探るⅤ」として栃木県大学地域連携活動支援事業の助成を得た。

調査・整理・成果公開参加者　（学年は2024年３月現在）

奈良大学　小林青樹（教授）　上野弘樹（文化財学科２年）

國學院大學栃木短期大学　家田貢希　菅原駿馬　関口琉惺　湯本慶　若林結（日本文化学科２年）　宇賀神葵　河又有沙　倉澤永菜　齋藤紳士　島方香奈　中村風香　並木駿弥　橋本もえ花　早川心晴　府中陸颯　渡辺陽世（日本文化学科１年）　岩下愛美　大西結子（人間教育学科２年）　戸山柚葉　日向野竜司（人間教育学科１年）　早川冨美子（教授）　大工原豊（准教授）　岸美知子（助手）　柿沼里恵子（助手）　高垣美業子（学芸員）、博物館実習Ⅱ受講生　木村久雄

國學院大學　久保有加　都築あおい（４年）　**立正大学**　下岡順直（准教授）　小太刀理空　（地球環境科学部３年）

国立歴史民俗博物館　中村耕作　**壬生町立歴史民俗資料館**　伊沢加奈子　**とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター**　佐藤有紗

真和技研　山入端優華　**長野市埋蔵文化財センター**　越志凪沙　**山梨県教育委員会**　岩永祐貴　桐部夏帆　**新潟県教育委員会**　荒木清花

協力者

中根地区　中根八幡神社　栃木市教育委員会　栃木県教育委員会　下野新聞社　FMくらら857　国立歴史民俗博物館

田村正昭　石塚孝市　福富林　小島正明　福富善明　成松尚子　高見哲士　永島幸　小沢美和子　初山孝行　尾島忠信

藤田典夫　芹沢清八　角田真也　塚本師也　植田真　林克彦　角田祥子

足立佳代　江原英　江原美奈子　小曽根葉月　鬼塚知典　渋谷舞業　香川真穂　金子奈央　菅頭明日香　小山百恵　實松幸男

柴田祐希　須藤和佳　高村敏則　田村博　中野喬介　木村侑真　宮下昌文　宮島尚子　宮田絞　森田華宙

本報告のほか下記において成果の一部を発表した

中根八幡遺跡学術発掘調査団　2023.3「中根八幡遺跡」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報45　令和３年度（2021）』（栃木県埋蔵文化財調査報告第412集）

國學院大學栃木短期大学考古学研究会・博物館学研究会　2023.10.26「文化交流の交差点「栃木」の起源を縄文時代に探るⅤ」栃木県大学地域連携活動支援事業中間報告会（栃木県庁）

國學院大學栃木短期大学考古学研究会・博物館学研究会　2023.2.5「文化交流の交差点「栃木」の起源を縄文時代に探るⅤ」栃木県大学地域連携活動支援事業報告会（栃木県庁）

「令和５年度日本史系サークル合同展示」國學院大學栃木学園参考館　2023.10.28～

「中根八幡遺跡第９次発掘調査速報展」栃木市役所４階　2023.12.12～12.26

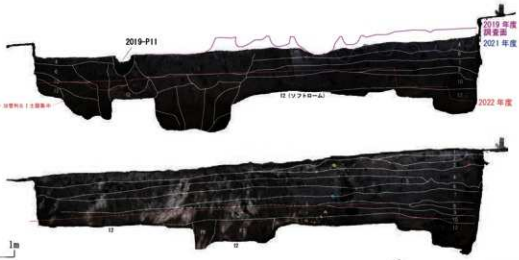
「学習講座　栃木の縄文時代をもっと知ろう（講演会・ワークショップ）」とちぎ蔵の街楽習館　2023.8.5、11.11、12.9

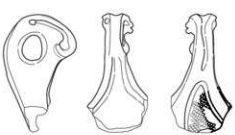
１～８次の年次報告は全国遺跡報告書総覧に掲載している

【石包丁参考文献】

野本孝之　1989「東日本の石庖丁」『國學院大學考古学資料館紀要』第５輯　pp.1-13

平野進一・相京建史　1991「群馬県出土の磨製石庖丁」『群馬県立歴史博物館紀要』第12号　pp.23-36



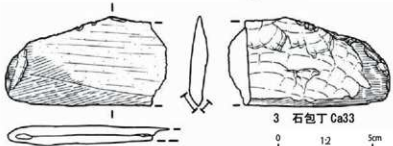


1 鳥形突起 Cb34

0 1:3 10cm

2 大形土器片 Ca32-P1

0 1:6 20cm



3 石包丁 Ca33

0 1:2 5cm